

秋田市新屋浜貝塚採集資料

—— 鍵野目久米蔵コレクションより ——

庄内昭男*・石川恵美子**

I はじめに

新屋浜貝塚の資料は、故鍵野目久米蔵氏が昭和30年に採集し、昭和50年当館に寄贈されたものである。かつて奥山潤氏が鍵野目久米蔵氏採集土器の一部を『秋田考古学』に報告しているが、日本海側で数少ない貝塚資料でありながらこれまで調査報告されていないこと、収蔵資料に骨角器、漆塗櫛などの貴重な資料が含まれていることから、ここに資料紹介した。

II 新屋浜貝塚の概要

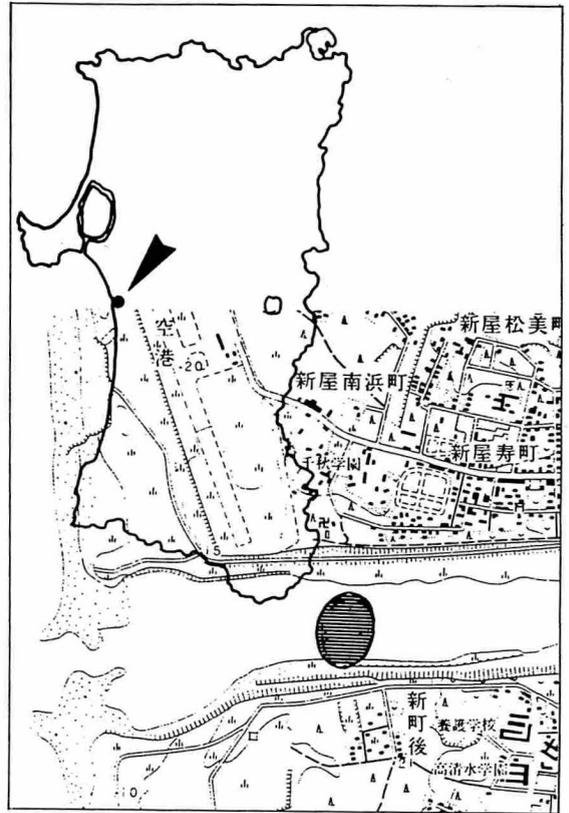
洪水常習地であった秋田市南部を被害から守るため行われた、雄物川放水路改修工事中に発見された遺跡である。昭和30年に遺跡の一部が残っていることが確認されていたが、その後護岸工事が行われたため、現在その位置は確認できない。

遺跡の発見状況については、昭和6（1931）年に調査を行った秋田市豊岩の故武藤一郎氏の報文および新聞記事から要約してみたい。

放水路改修工事は大正6（1917）年に開始され、遺跡の発見は昭和2（1926）年6月ということである。武藤氏は当時日新小学校勤務の柳沢氏から連絡をうけ、遺物包含層を確認し、土器・石器を採集している。遺跡に貝層がともなっていることは、昭和4年の新聞記事によって前年に確認していることがわかった。昭和6年には5月27日から3日間調査を行い、貝層から骨角器などを採集している。

鍵野目氏が残っていた貝層を確認し、ここに紹介した遺物を採集したのは、27年後の昭和30（1955）年3月24日である。

遺跡の概要について、武藤・鍵野目両氏の話をもとめると以下のとおりである。



第1図 遺跡位置図

遺跡の位置は河口から900m程入ったところで石山観音の直下にあたる。当時の砂丘頂上より20m下、標高9mのところ遺物包含層が確認された。包含層は黒色腐植土層で60cmの厚さがあり、長軸200mの楕円形状の広がりをもっていたとしている。なお広がりの方角は、東側で湿地帯を、西側で貝層を確認している。鍵野目氏は、放水路の左岸、水面より2～3m上位のところ、西から東に向けて傾斜する幅10mの貝層を確認している。

* * * 秋田県立博物館

III 採集資料

土器、土偶、土製品、石器、木製品、骨角・牙製品
自然遺物の順序で紹介する。

土器(第2図1~28・第3図29~59)

総数で191点の土器片が収蔵されている。口縁部破片で器形・文様の特徴がつかめるものを選びだして図化した。*以下説明に付した数字は、実測図番号である。

大部分が縄文時代晩期のものであり、それに縄文時代後期のものが一点、古代のあかやき土器が二点ふくまれている。

縄文時代後期のものは1の鉢形土器で、平行沈線で区画された縄文の帯を交互に磨り消している。

縄文時代晩期の土器で復元できたものは、浅鉢形土器が一点だけであるが、ほかに皿・鉢・深鉢・注口・壺形土器がふくまれている。ここでは山内清男氏の分類にしたがって4類に分け、器形毎に区分の特徴を明らかにした。

1類 2・3は波状口縁の鉢形土器で、磨り消し縄文手法により文様が描かれ、三叉文による構成がみられる。

2類 4~6は鉢形土器で、口縁部がゆるやかに湾曲している。口縁部上端の狭い範囲に平行沈線で区画された文様帯があり、胴部には縄文が施されている。口唇にはB字状の刻み目がつく。7は口縁部が外反している。口縁部の文様帯は階段状に平行沈線がめぐり、2段に点列がめぐっている。胴部上端にはB字状の突起がつく。8~12は浅鉢形土器で、口縁部上端が小さく内湾している。上端は口縁にそって平行沈線とそのあいだを連続する点列がめぐり、下には磨り消し縄文手法による雲形文が描かれている。13~19も浅鉢形土器であるが、口縁部がわずかに湾曲しているものである。口縁にそって平行沈線がめぐり、体部に磨り消し縄文手法による文様帯をもつ。口唇には楕円形状の刻みがつく。なお口唇の一端に小さな突起をもつものがある。20は平底の底部である。21~25はいずれも朱彩された浅鉢形土器で、24を除いて口唇にそって1~2本の平行線がめぐらただけで特徴的な文様がない。13~19の浅鉢形土器と同様に口縁にそって沈線がめぐることがあることから2類に入れた。25は赤漆が塗ってある。27は皿形土器で、口唇に突起がついている。28は

壺形土器の頸部で、2本の隆帯の結び目にB形突起がつく。

3群 29~36は鉢形土器で、口縁部が短く内傾あるいは直立し、口唇が外に張り出している。口縁部の文様帯は平行沈線あるいは無文である。29の口縁部には頸部のこぶにつながる沈線文がひかれ、その下に磨り消し縄文手法による雲形文が描かれている。33~36は口縁にそって数本の平行線がめぐり、その下の胴部には縄文が施されている。37~39も鉢形土器で、口縁部がわずかに湾曲している。口縁にそって2~3本の平行沈線がめぐり、胴部には縄文が施されている。なお口唇には刻み目がつく。40・41は鉢形土器の台部である。42は注口土器の胴部上半である。頸部が張り出し隆帯で装飾されている。43~45は壺形土器で、無文の口縁部上端に隆帯がつく。

4類 46~48は鉢形土器、49は壺形土器である。いずれも文様帯に工字文が描かれている。47・48の工字文は3本の平行沈線に区切り・合せ目をくわえたものである。

50~56は深鉢形土器の口縁部破片である。各類に分けるほどの特徴がとらえにくい。50~54は口縁部が外傾するものであり、50~52は縄文、53・54には縦位の条痕が施されている。52の口唇は波状を呈している。55は口縁部が内傾しており、狭い無文帯となっている。頸部に沈線がめぐり、胴部には羽状縄文が施されている。56は無文の口縁部が外反している。頸部に平行沈線がめぐり、その下の胴部には縄文が施されている。口唇には沈線が入り、凹状を呈している。深鉢形土器の50~55は2・3類に、56は4類に伴うと考えられる。

57は袖珍土器で、3分の1が残っている。

以上の器形・文様の特徴から1類は大洞B-C式、2類は大洞C₁式、3類は大洞C₂式、4類は大洞A式に比定される。

58・59のあかやき土器はいずれも杯形土器の底部の破片であり、底面に回転糸切りの痕跡を残している。平安時代後半の年代が考えられる。

土偶・土製品(第7図1・2)

土偶 中空の遮光器土偶頭部である。高さが8.5cmで比較的大型のものである。表面に朱彩された痕跡が

ある。

動物形土製品 現存する長さが3.1cmと小さいものである。裏面は平坦であるが、もり上げた表面に目・鼻が表現されている。鼻を強調していることから猪のような動物にみえる。

石器 (第4図1~13・第5図14~19)

石器は、石鏃7点、石錐2点、石匙4点、石筥2点、搔器1点、削器1点、石核1点、石棒1点の計19点である。*説明に付した()内番号は実測図番号である。

石鏃(第4図1~7) いわゆる有茎石鏃であるが、その中でも、a類:素材となる剥片の全面に丁寧な押圧剥離を施して、左右対称に整形したもの(1~4)と、b類:素材となる剥片の周縁部に集約的に細部加工を施すことによって整形したもの(5~7)とに、分類される。

a類では器長にばらつきが認められ、b類では素材形状を反映して、形状のばらつきが顕著である。

石錐(第4図8・9) つまみ部をもたない棒状のもの(8)と、ゆるやかにつまみ部を作り出したもの(9)とがある。両者とも、先端部はそれほど尖鋭ではなく、略三角形の断面形をもつ。前者には、石鏃としてとらえられているものもあり、その識別は困難であるが、後者と同様な先端部形状を呈することから、石錐として分類した。

石匙(第4図10~13) 縦型石匙2点(10, 11)と、横型石匙2点(12, 13)とに分類される。縦型石匙は、2点とも縦長剥片を素材とし、剥片の打面側をつまみ部として利用している。つまみ部の作り出しは、簡単な加工によるものである。横型石匙は、2点の中でもかなり差異が認められる。12は、粘板岩という石質の為か、素材となる剥片の背面から腹面にむかって粗く、急斜度な加工を施すことによって整形している。刃部は鋭利な素材面をそのまま利用しており、損耗が著しい。13は、横長剥片を素材として、周縁に丁寧な押圧剥離を施すことによって典型的な形に仕上げている。つまみ部には、両面ともに、べっとりとしたアスファルトが付着している。

石筥(第5図14・15) 14は、一部に礫皮面を残しており、部厚い分割礫を素材にしていると思われる。加

工も粗く、器面の凹凸も著しい。末端左側が偏減りしており、機能部位がうかがわれる。15は、幅広の縦長剥片を素材としており、器厚が一律で、形が整っている。刃部と思われる末端は、ほぼ直刃である。片面加工によって刃部を作り出している。

搔器(第5図16) 石筥を小形化した形状を呈するが、石筥の刃部再生がくり返し行われた結果生じたものではない。部厚い小形の横長剥片を素材として、片面加工によって、直刃の刃部を形成している。腹面には、火熱を受けて器面がはねとんだ痕跡がある。

削器(第5図17) 大形の横長剥片を素材として、両面からの押圧剥離によって、直刃の刃部を作り出したものである。

石核(第4図18) 河原の転石を利用したものであり、もともとの大きさは、幼児の拳大位であったと思われる。石核に残された剥離痕から、貝殻状の横長剥片が剥ぎ取られたと推察される。このような剥片は、石鏃の素材に用いられることが多い。

また第4図10の縦型石匙も、背面には、転石と思われる礫皮面を残しており、河原で入手できる頁岩の転石を石器原材料として利用していたことがうかがわれる。

石棒(第5図19) 両端が欠損しているが、断面はふくらみのあるレンズ形で、稜を持つのが特徴である。

骨角・牙製品(第6図1~9)

骨鏃1点、ヤス状尖頭器3点、細形刺突具1点、釣針1点、用途不明の鹿角製品1点、垂飾品2点の計9⁽⁵⁾点が採集されている。

骨鏃(第6図1) きれいな柳葉形に整形されており、先端部の断面形はレンズ形、基部の断面形は略円形である。器体の下半部には、アスファルトの付着が認められ、器体の半ばまでをソケットに装着し、石鏃同様に、矢の先端として用いられたものと思われる。

ヤス状尖頭器(第6図2~4) 3は、基部形状が定かでないが、先端部は鋭利に砥ぎ出されている。2, 3とも、断面はV字状であるが、2よりも3の方が、裏面の溝が深く明瞭である。4は、断面形が楕円状で、器体が若干の反りを持つ。3点とも鹿骨を素材とするが、その部位はそれぞれ異なっているようである。

細形刺突具(第6図5) 器体下半部にアスファルトが付着している。器体下半部をソケットに固定したのであろう。先端部は尖鋭で直径約2mmの円形の断面を呈する。材質は不明である。

釣針(第6図6) 湾曲部と針先部を欠いている。材質は骨製と思われる。長さは約30mm, 直径も残存する最大部分で約2.8mmと, 非常に繊細に作られている。

鹿角製品(第6図7) 鹿角の枝の先端を切断し, その切り口に, 一条の溝がまわっている。用途は不明であるが, 弓はず状角製品の製作には, 本例のような工程をとるといふ指摘もある⁽⁶⁾。

垂飾品(第6図8・9) 8は, V字状の断面形をもち, その一端に穿孔したものである。イノシシの下顎犬歯の前後両端を切断し, エナメル質部分を特に残したものであるという指摘がある⁽⁷⁾。9は骨の表面を砥き出して, 断面を略六角形に仕上げているが, 面構成に規則性は認められない。上端近くに, 完結しない一条の溝がまわっている。全体に黒っぽく, 火熱を受けている可能性がある。

加工痕のある骨(図版3下) 加工痕のある骨は, ①骨髓食の為に割られたと思われるものと, ②骨角器の素材として加工を施したものとに, 2大別される。

①例は, いわゆるスパイラル(らせん状)に割れるもので, 骨髓食の作業の中で生じるものであることが指摘されている⁽⁸⁾。

②例は, ①例にさらに加工を加えたもので, 半截された状態となっている。ほとんどの半截面は, 片側の緻密質部(約4.5mm)が擦り切られており, こうした作業の後, 楔などを用いて打割されたと推測される。

また, スパイラル・フラクチャーによって生じるV字状の末端部を砥き出して尖頭部を作り出したものの認められることから, 骨髓食によって生じたスパイラル剥片を, 骨角器として有効に再利用していたことが, 本遺跡においても認めることができた。

木製品(第7図3・4)

棒状木製品(第7図3) 一端が欠損しているが, 残存部の長さは, 56.5cmである。残存している一端は, 身部に比して細く削り出されており, 末端部は, 球状に近いふくらみをもっている。用途は不明である。

“クルミ層下より発掘”という注記がある。

漆塗り櫛(第7図4) 歯はすべて欠落している。組部が残っており, 現存する高さが1.7cm, 幅5.0cmである。歯が抜けた穴の大きさは直径3mmである。歯を2mm間隔でおき, 1.5mm幅の細材でおさえしている。パテ状のもので固めて整形した後に, 赤塗を塗っている。

自然遺物

洗淨済の獣骨と貝殻, クルミの核, 重さ5kgの貝層ブロックが収蔵されていた。

洗淨済の動物遺存体については, すでに同定がされ⁽¹⁰⁾ており, 今回は貝層ブロックから出た魚骨の同定⁽¹¹⁾を加えてまとめた。

《貝類》

コタマガイ

ヤマトシジミ

貝層ブロックから検出された標本は, コタマガイで, ヤマトシジミが2片はいるだけであった。コタマガイの殻長は45~50mmである。ヤマトシジミの殻長は18~30mmである。

脊椎動物

《哺乳類》

ニホンジカ=上顎白歯3, 下顎白歯3, 上顎乳白歯1, 肩甲骨(左)1, 距骨(右)1

イノシシ=上顎骨(左)1, 上顎切歯1, 下顎骨1, 下顎歯2, 肩甲骨(右)1, 上腕骨(左)2, 橈骨(右)1, 尺骨(右)1(?), 腓骨1, 踵骨(右)1

ムササビ=大腿骨(右)1

《魚類》

スズキ=鰓蓋骨(左)1

クロダイ=上顎骨1

トビエイ科=歯板2(同一個体の可能性あり)

種不明軟骨魚類=脊椎骨22(トビエイ科?)

ウグイ属=咽頭骨(右)1, 角舌骨(右)1, 腹椎7, 尾椎8, 基後頭骨(?)1

ギギ科=胸鰭棘2

ニシン科=第2脊椎骨1

ヒラメ=腹椎1, 尾椎1

カレイ科=鋤骨1, 歯骨(右)1, 第1脊椎骨1, 第2脊椎骨1, 尾椎5

カレイ科(?)=尾椎7

マフグ科=歯骨(左)1(右)1, 前上顎骨(左)1, 前
 鰓蓋骨(右)1, 方骨(左)1(右)2, 上擬
 鎖骨(左)2, 舌顎骨(右)1, 腹椎4, 尾
 椎1

不明魚骨=鋤骨(?)1, 前上顎骨(?)1(右)1, 遊離
 歯1, 主鰓蓋骨(左)1, 上擬鎖骨(右)1,
 脊椎骨5(3~4種類を含む), 尾部棒状
 骨1

《植物遺体》

オニグルミ=縫線にそって半截状態のものが39片あ
 り内に胚乳の炭化したものもみられる。

IV ま と め

今回報告する資料は、断面採集という性格上、遺跡
 の様相をそのまま表わしているとはいいい難いが、土器、
 石器、骨角・牙製品、自然遺物のそれぞれについて特
 色をとらえ、まとめとしたい。

※採集された土器片では、縄文時代晩期の大洞 C₁、
 C₂ 式のものが多く、朱彩あるいは漆塗りされた精製
 土器のあることが注目される。また洗浄した貝層ブロ
 ックからみつかった破片が、大洞 C₁、C₂ 式に比定され
 ることにより、貝層の形成も縄文時代晩期中葉の頃と
 考えられる。

※石器の器種構成は、縄文時代晩期の柏子所貝塚の
 ものに、磨製石斧を除いて共通している。海浜部に立
 地するという条件を考慮するならば、本遺跡の石器組
 成は、おそらく柏子所貝塚の石器組成と大差なかった
 ものと推測される。

本遺跡の石鏃の中には、形態の違いや同一形態下
 におけるばらつきが認められたが、これは狩猟対象動物
 の違いをはじめとして、様々な規制を反映しているも
 のといえよう。

本遺跡では、シカ・イノシシの骨が検出されている
 ことから、石鏃がそれらの狩猟に関与していた可能性
 も考えられる。⁽¹²⁾

	縦型石匙		石鏃		磨製石斧	
	石鏃	横型石匙	石鏃	石鏃	石鏃	磨製石斧
柏子所 (116)	31%	9%	21%	6%	6%	12%
萱刈沢 (138)	12%	20%	20%	12%	9%	石鏃30%

0.1% ↓
 秋田県貝塚遺跡における石器組成

※骨角・牙製品の中では、ヤス状尖頭器、釣針など、
 漁撈に関わるものや刺突具が多いことから、石鏃を含
 めても、狩猟・漁撈具はかなりのバラエティを持って
 おり、狩猟・漁撈方法及び対象動物の多様さを示唆し
 てくれる。

漁撈についてみるならば、釣漁法⁽¹³⁾、ヤス漁法の
 行われていたことは確かであろう。

網漁法に関する遺物(石錘・土錘)は採集されてい
 ないが、限られた資料故、その存否は定かではない。

しかし、中期の萱刈沢貝塚でみられた石錘が柏子所
 貝塚では発見されておらず、時期的な漁撈方法の違い
 も想定される。

※自然遺物からは、貝塚が形成された時期における
 自然環境の手がかりが得られた。

○貝類と生息場所

ヤマトシジミ=汽水域、泥~砂底
 コタマガイ=水深10~50m, 砂底

○生息水域と魚類

鹹水性=クロダイ、スズキ、トビエイ科、ニシン科、
 ヒラメ、カレイ科、マフグ科

汽水および淡水性=ウグイ属

純淡水性=ギギ科

遺跡の立地および上記の動物遺存体の生息条件から
 みて、当時の遺跡は、外洋に近いラグーン内にあった
 と推定される。⁽¹⁴⁾

以上のように新屋浜貝塚では、採集資料にもかかわらず
 様々なデータを提供してくれている。あらためて
 貝塚遺跡の重要性を考えさせられた次第である。

謝 辞

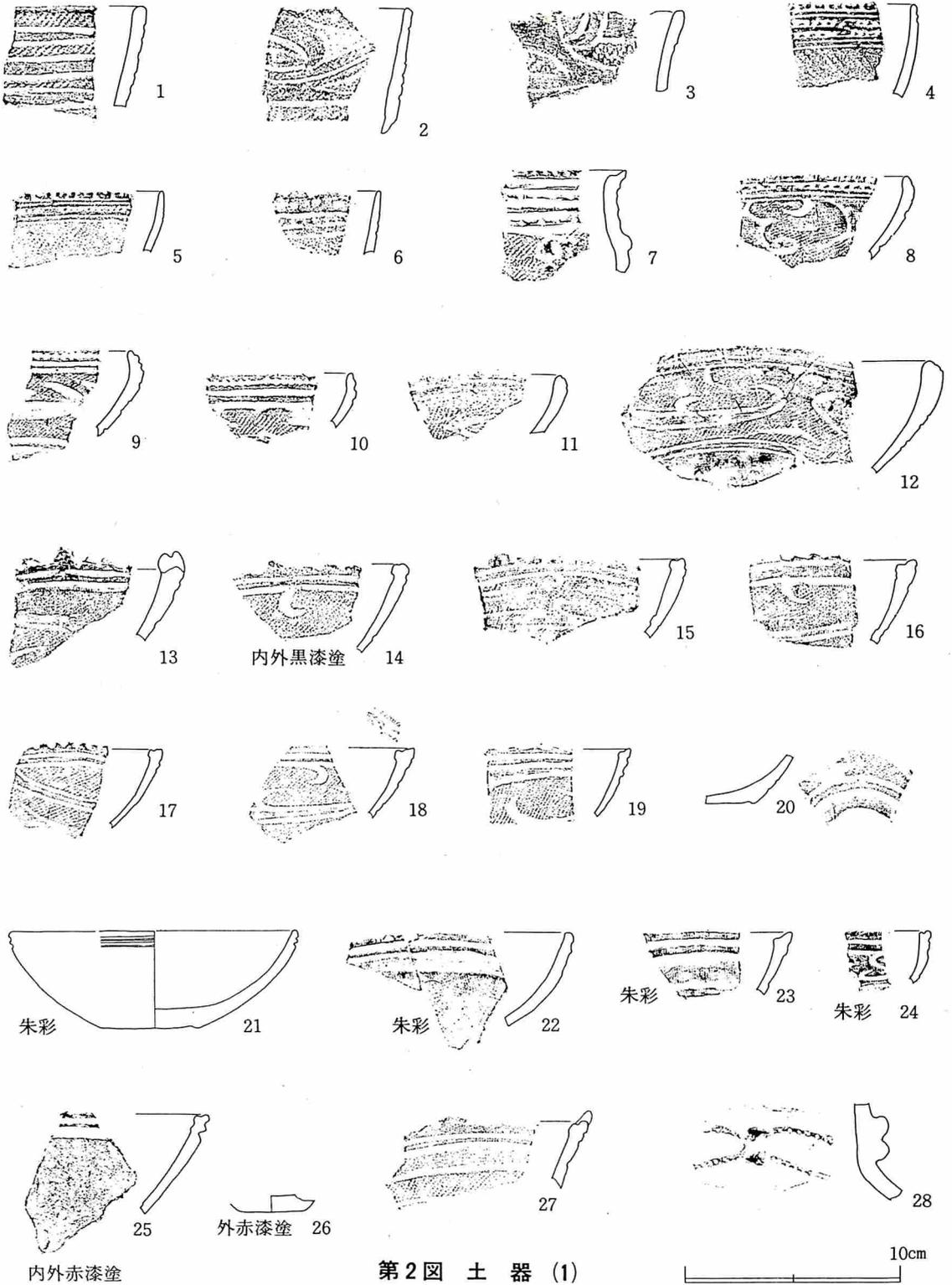
最後になりましたが、獣骨、貝の同定に関するデー
 タを提出していただきました早稲田大学考古学研究室
 金子浩昌氏、魚骨を同定していただきました宮城県教
 育委員会文化財保護課菅原弘樹氏、貝類を同定して
 いただきました男鹿市教育委員会渡部晟氏、骨角器の実
 測をしていただきました秋田県埋蔵文化財センター小
 林克氏、動植物に関して御教示いただきました秋田県
 立博物館高橋祥祐氏、幸丸政人氏に、記して感謝申し
 上げます。

註

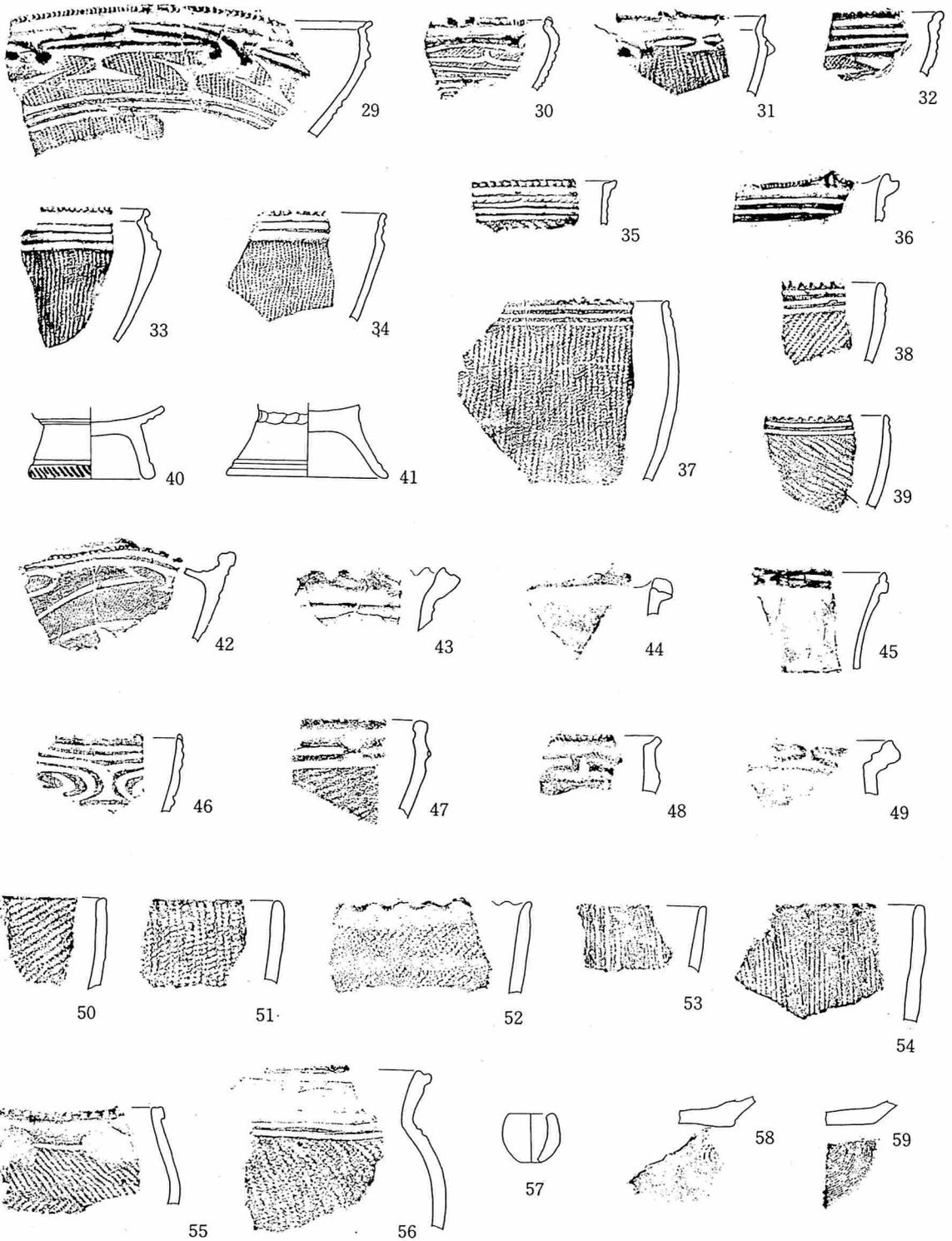
- (1) 鍵野目久米蔵氏は、採集資料に墨書注記しており、「新屋」「新屋貝塚」「新貝」「アラヤ」「ア」「昭五、六、一四 鎗目氏寄贈 新屋」「新屋貝塚 昭和卅年三月廿四日」が判読できる。
- (2) 「秋田市周辺の縄文晩期末及後続期の遺跡概要」『秋田考古学第22号』(1963)に22点が紹介されている。
- (3) 「羽後國新屋濱砂丘遺跡に就て」『秋田考古学会誌 第1巻第6号』(1926)
「アサリ貝主体の珍しい貝塚発見—新屋濱から—」
秋田魁新報昭和6年6月2日朝刊
「古代秋田の文化を研究—研究室から—」秋田魁新報昭和4年2月28日朝刊
- (4) 「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄文式土器の終末」
『考古学第1巻第3号』(1930)
- (5) 骨角器および貝類・哺乳類・魚類(スズキ・クロダイ)の同定は、早稲田大学考古学研究室 金子浩昌氏による。
「秋田県下縄文貝塚出土の動物遺存体について」
(秋田県教育委員会委託調査報告より)
- (6) 註(5)に同じ。
- (7) 註(5)に同じ。
- (8) 丹羽百合子「解体・分配・調理」『縄文文化の研究 2 生業』(1983) 雄山閣
- (9) 註(8)に同じ。
- (10) 註(5)に同じ。
- (11) スズキ、クロダイを除く魚骨の同定は、宮城県教育委員会文化財保護課菅原弘樹氏による。
- (12) 田柄貝塚では、石鏃の射込まれた痕跡のある動物遺体(ニホンジカ2例、イノシシ4例)が検出されている。
- (13) 註(5)の報告の中で、本遺跡の釣針は太平洋側のものとは異なり萱刈沢貝塚出土の釣針の伝統上にあることが指摘されている。
- (14) 註(5)の報告にて推定されている。

引用・参考文献

- 秋田県教育委員会・能代市教育委員会(1967)『柏子所貝塚—第2次・第3次発掘調査報告書—』
宮城県教育委員会・建設省東北地方建設局(1986)『田柄貝塚I・II・III』
八竜町教育委員会(1979)『萱刈沢貝塚』
富樫泰時(1975)「菖蒲崎貝塚と秋田の貝塚」『鶴舞』
藤沼邦彦(1981)「縄文晩期の土器—東北地方—」『縄文土器大成4—晩期—』講談社
波部忠重・小菅貞男(1967)『標準原色図鑑全集3—貝—』
岡田 要(1965)『新日本動物圖鑑—下—』北隆館
秋田県立博物館(1978)『武藤一郎コレクション図録』

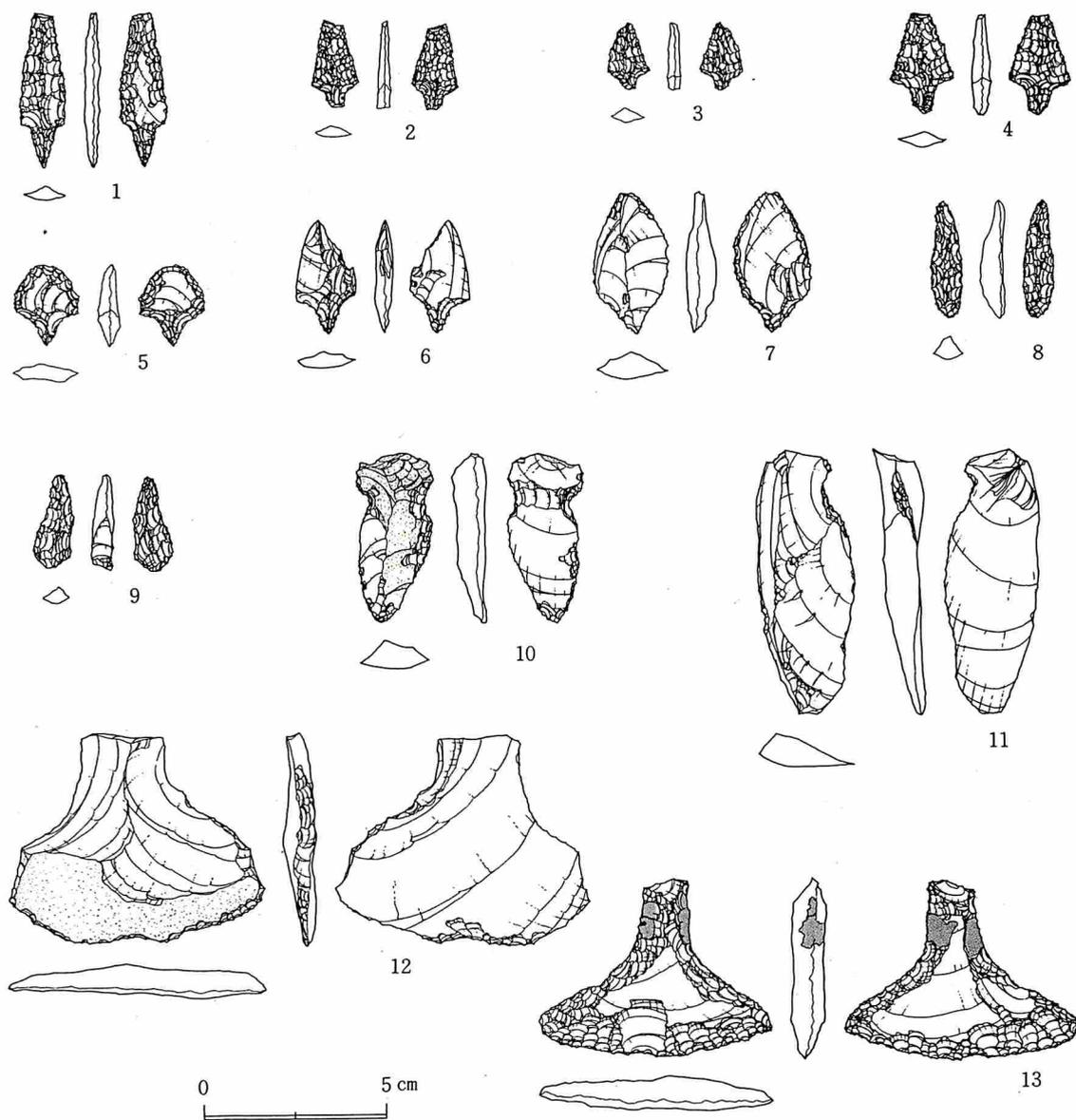


第2図 土器 (1)



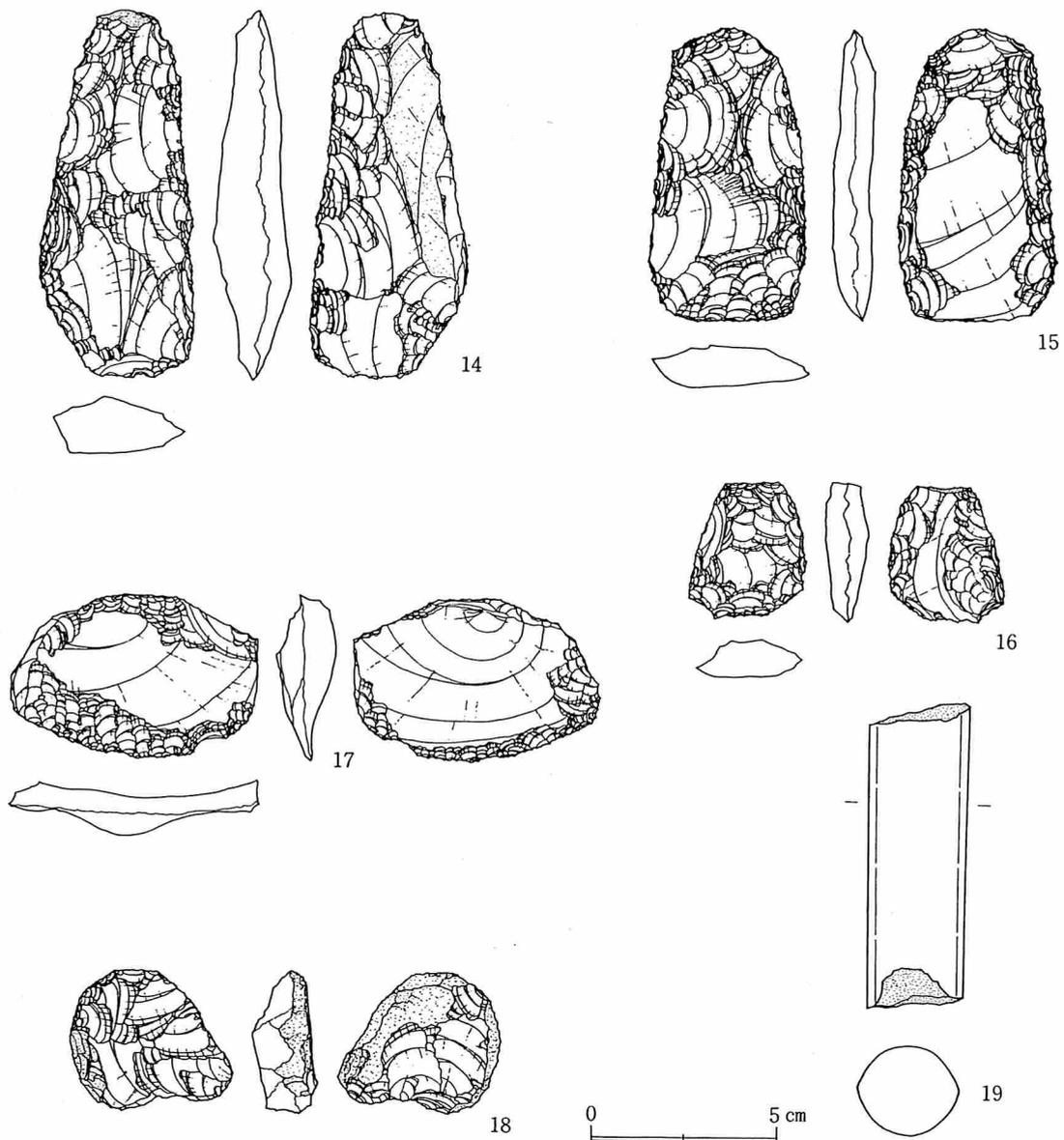
第3図 土器 (2)





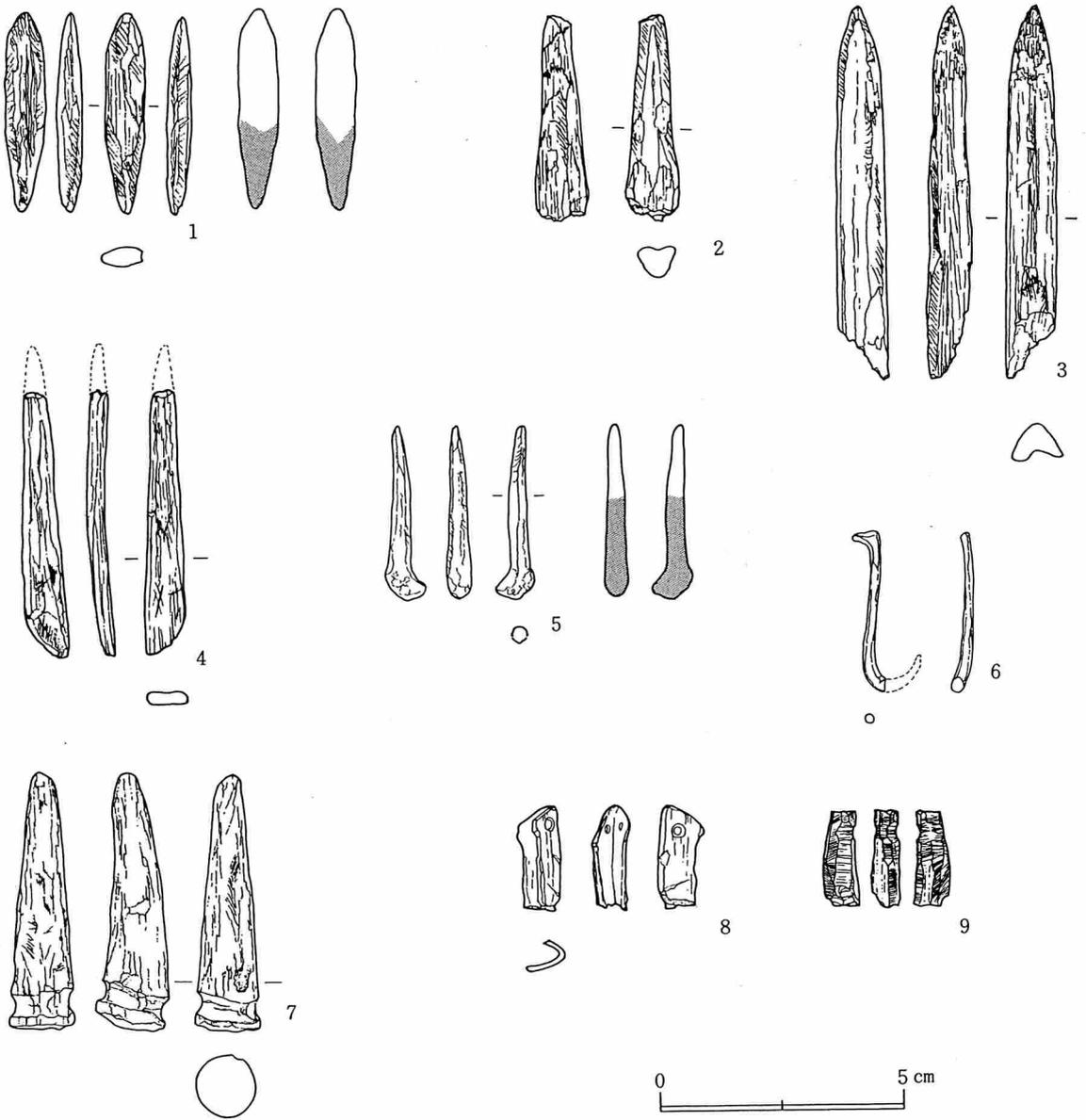
番号	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
1	石 鏃	頁岩	(42.2)	12.5	3.9	(1.9)	先端部欠損
2	"	"	(24.3)	12.6	3.5	(0.8)	先端部・基部欠損・基部にアスファルト付着
3	"	"	(18.7)	11.5	3.3	(0.6)	先端部・基部欠損
4	"	"	(27.7)	17.2	5.5	(1.8)	先端部・基部欠損, 基部にアスファルト付着
5	"	"	22.3	18.3	6.5	1.9	
6	"	"	31.1	(17.0)	4.9	(2.2)	側縁部欠損
7	"	"	(39.2)	20.7	9.1	(5.6)	先端部欠損, 基部にアスファルト付着
8	石 錐	"	32.4	8.8	6.4	1.8	
9	"	"	(25.7)	(10.5)	5.6	(1.5)	先端部・基部・側縁部欠損
10	縦型石匙	"	46.6	20.0	7.4	7.6	転石利用
11	"	"	(73.6)	26.1	10.8	(17.2)	先端部欠損
12	横型石匙	粘板岩	56.7	(69.1)	7.3	(27.1)	両側縁欠損, 風化著しい
13	横型石匙	頁岩	49.9	(64.2)	9.0	(20.4)	端部欠損, つまみ部にアスファルト付着

第4図 石器 (1)



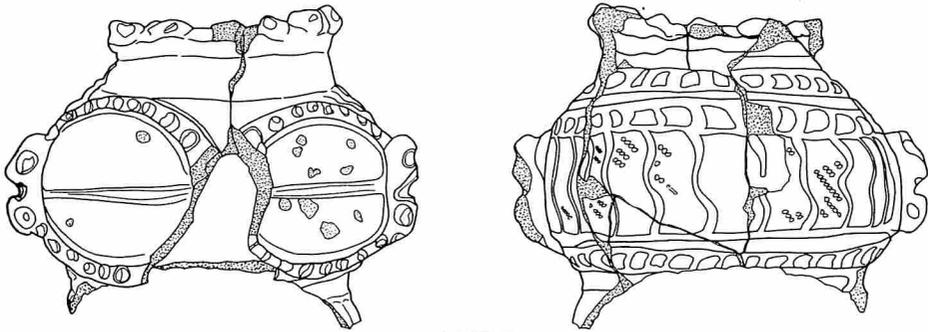
番号	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
14	石 錠	頁岩	100.6	41.6	19.2	81.5	
15	"	"	79.2	41.8	11.3	51.7	
16	搔 器	"	(37.2)	30.9	11.7	(14.9)	端部欠損, 火熱受
17	削 器	"	44.8	65.5	12.0	31.3	
18	石 核	"	39.0	39.8	17.0	28.9	転石利用
19	石 棒	粘板岩	(82.8)	28.1	23.5	(100.4)	両端欠損

第5図 石器 (2)

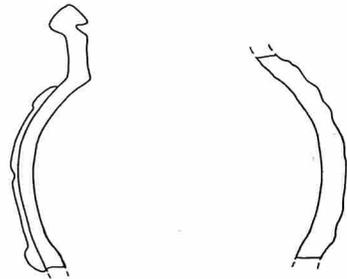
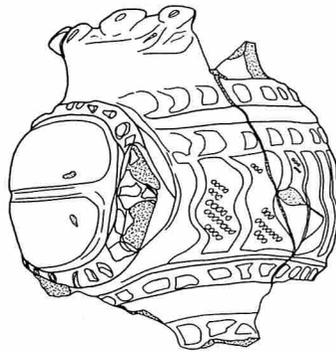


番号	器種	材質	長さ(mm)	幅(mm)	重さ(g)	備考
1	骨 鏃	—	41	8	1.7	基部にアスファルト付着
2	ヤス状尖頭器	鹿骨	(42)	11	(2.2)	先端部, 基部欠損
3	"	"	(77)	10	(6.0)	先端部磨耗, 基部欠損
4	"	"	(55)	8	(1.7)	先端部, 基部欠損
5	細形刺突具	—	36	8	0.5	器体下半部にアスファルト付着
6	釣針	—	33	(4)	(0.3)	湾曲部, 針先端欠損
7	用途不明品	鹿角	54	14	4.8	先端部にアスファルト付着
8	垂飾品	猪牙	22	10	0.6	
9	垂飾品?	—	(20)	7	(0.8)	両端欠損

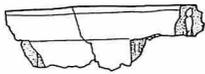
第6図 骨角・牙製品



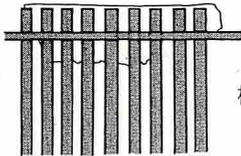
※表面朱彩



1 目の部分は粘土を重ねて作っている。表面には指でおさえた痕跡が残っている。



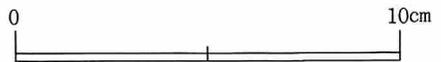
4



櫛骨組み模式図



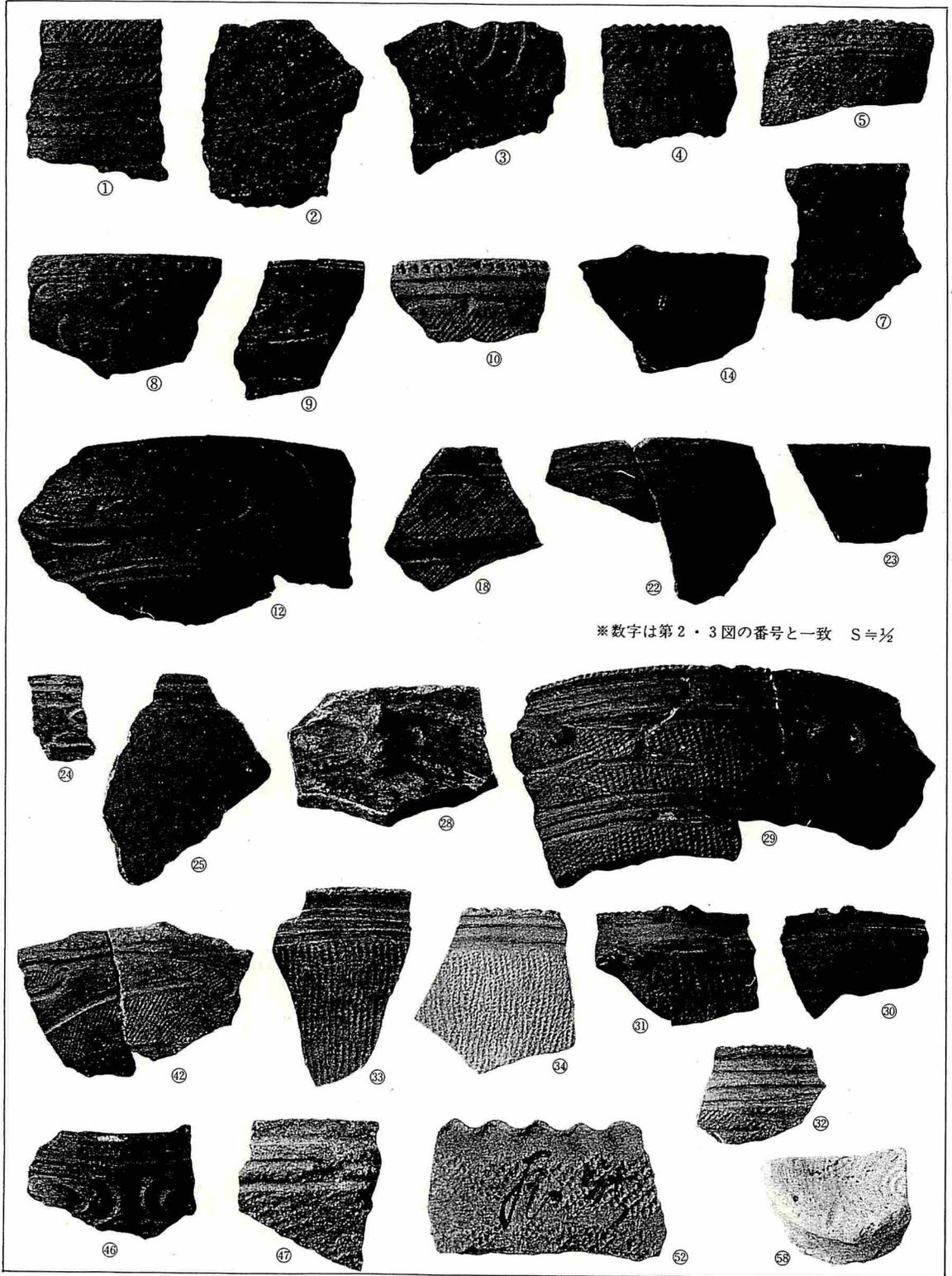
2



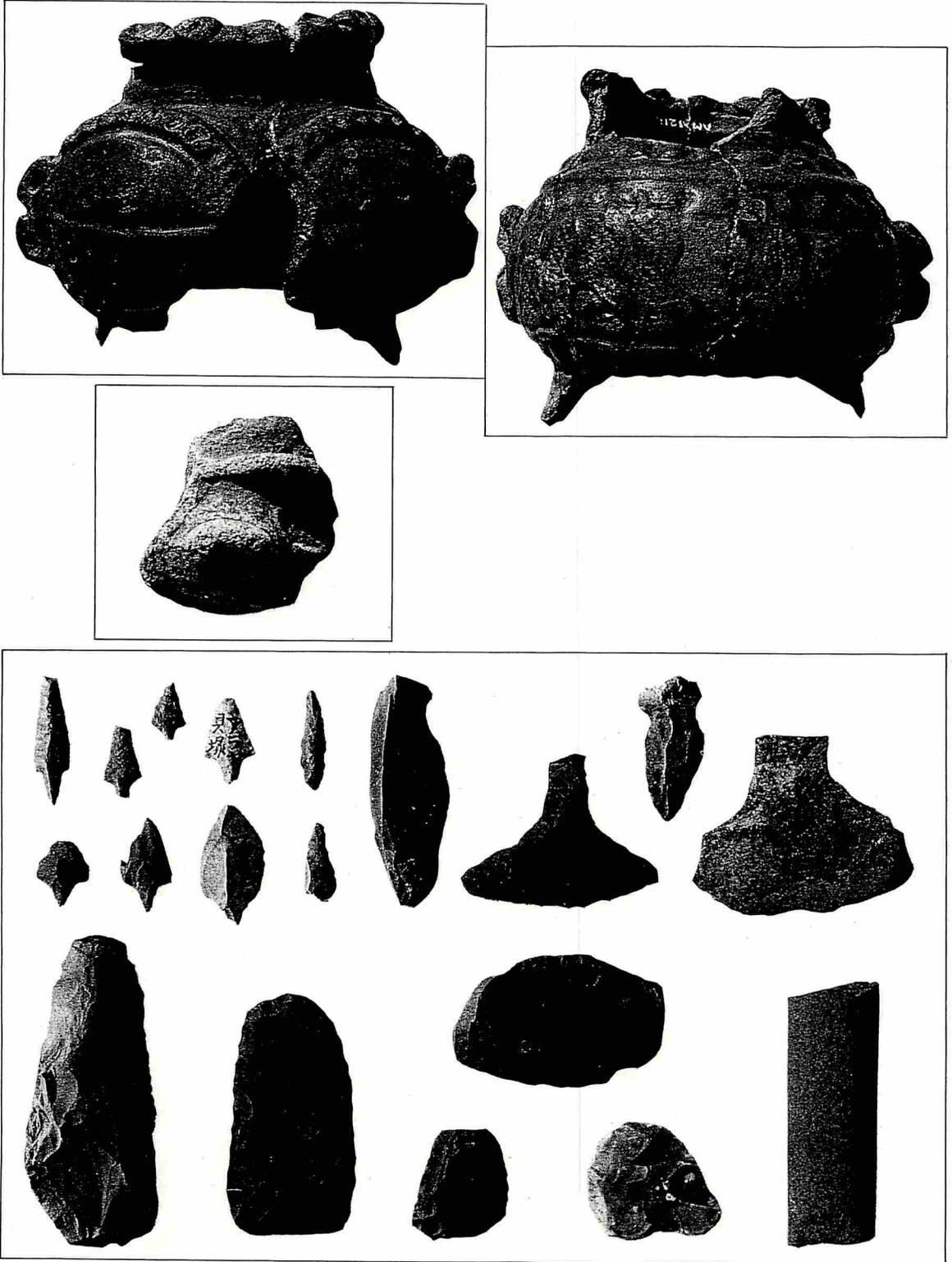
3



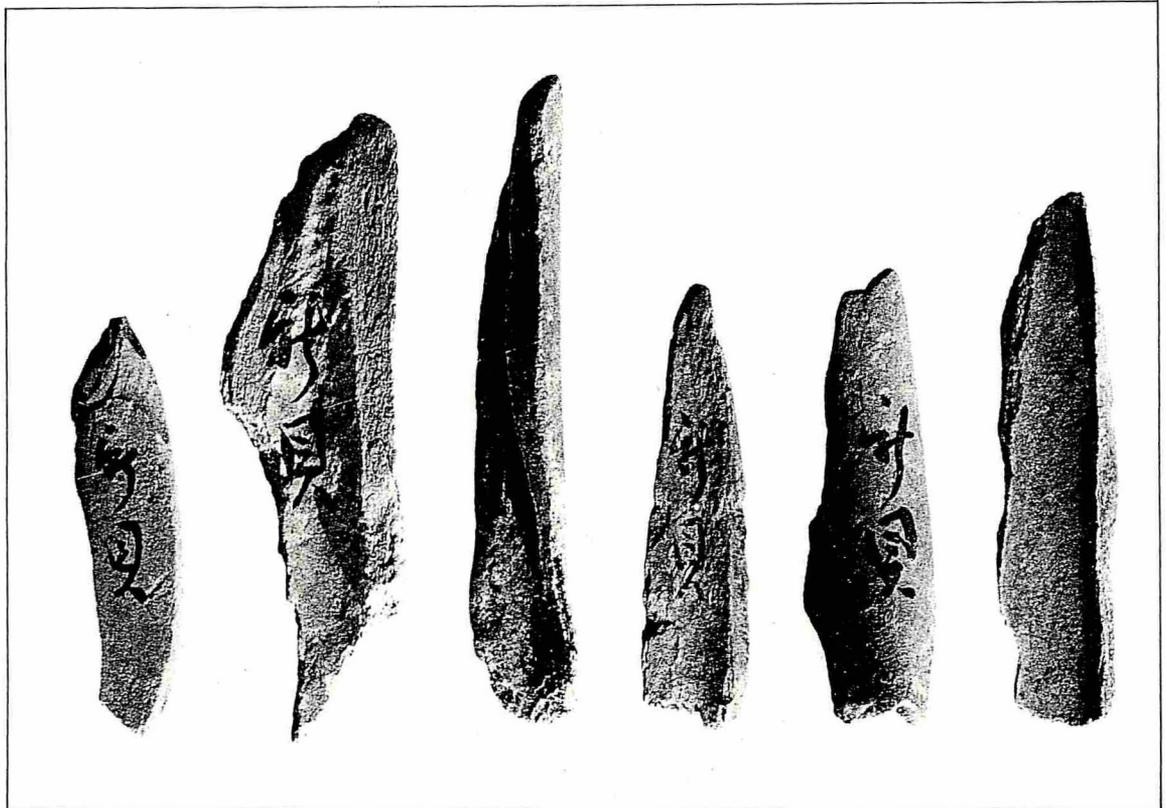
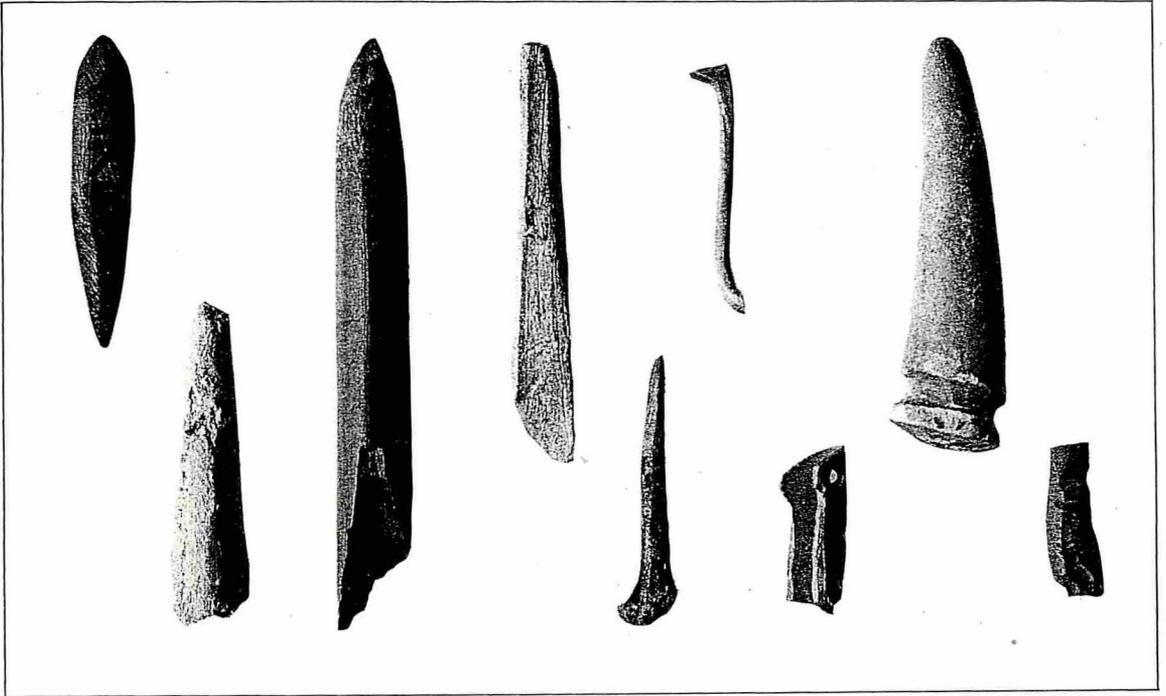
第7図 木製品, 土偶, 土製品



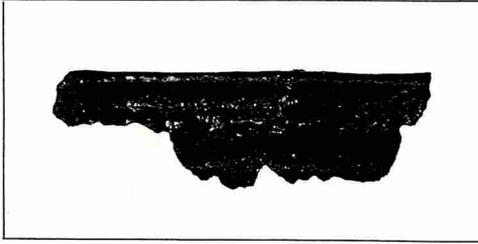
図版1 —土器—



図版2 —土偶，土製品，石器—

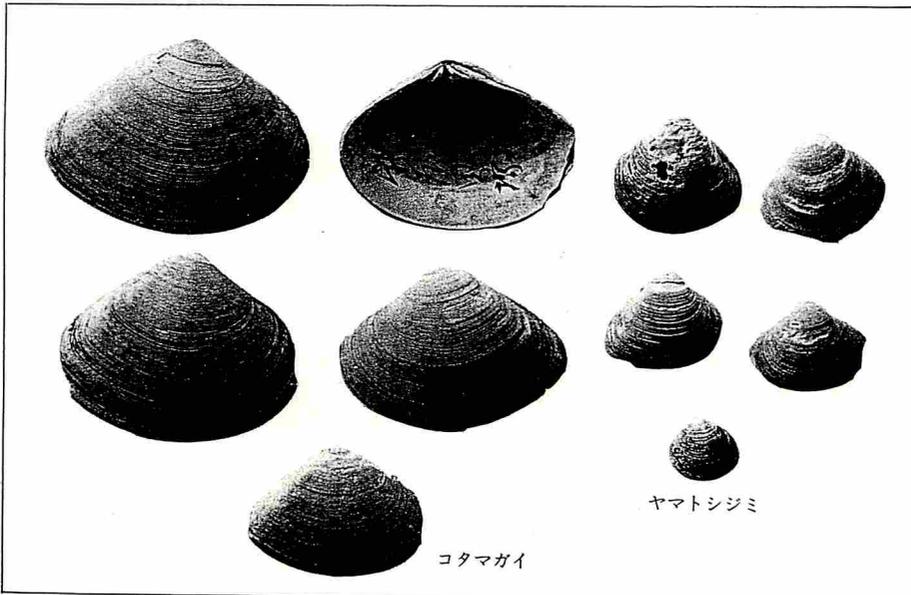
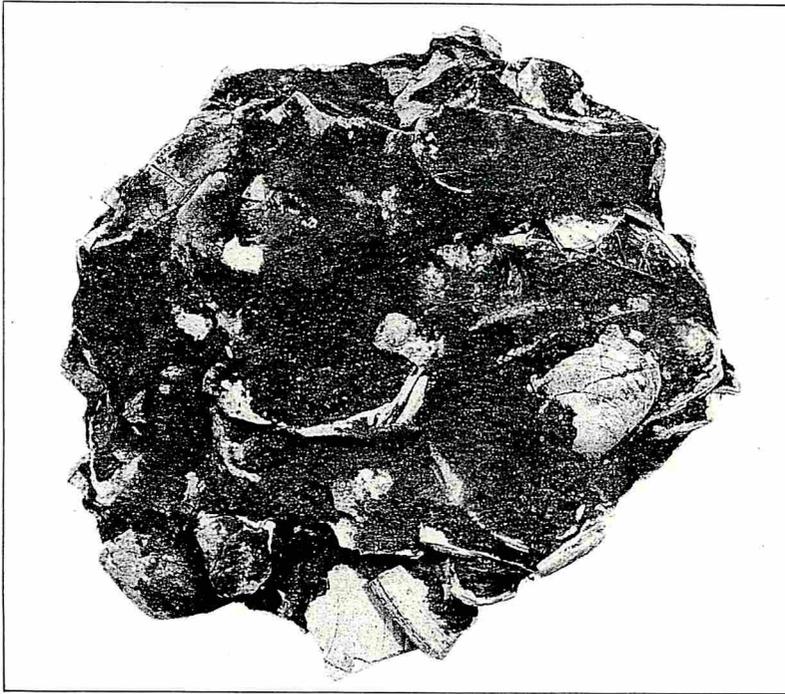


図版3 一骨角・牙製品，獸骨一



◁櫛

▽貝層ブロック



コタマガイ

ヤマトシジミ



△木製品

図版4 一木製品, 貝一